

# 「現代的なリズムのダンス」の授業に関する実態調査 — 大学生へのアンケート調査から —

長谷川 晃 一

岐阜聖徳学園大学教育学部

## Fact-finding for “The Dance of Modern Rhythm” class: Revealed by questionnaire survey of university students

Koichi HASEGAWA

キーワード：現代的なリズムのダンス 実施率 習得型 探求型 ステップ

### I. はじめに

平成 20 年告示の学習指導要領から、「生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて多様な運動の基礎・基本を経験することが望ましい時期」として、「武道」「ダンス」を含むすべての領域を男女必修とした<sup>1)</sup>。授業が中学 1、2 年生で男女必修化された。ダンスの目的は、「イメージを捉えた表現や踊りを通じた交流を通して仲間とのコミュニケーションを豊かにすること」や「仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージを捉えて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを感じる運動」であり、「フォークダンス」「創作ダンス」「現代的なリズムのダンス」から選択することとされている<sup>2) 3)</sup>。中でも、平成 10 年度告示の学習指導要領改訂から加わった「現代的なリズムのダンス<sup>4)</sup>」は、生徒の興味関心が高いなどの理由から「導入直後から積極的に授業に取り入れられ、10 年足らずで最多採択種目となり、24 年度には 7 割以上の採択率になった<sup>5)</sup>」とされている。文部科学省 (2018) は、「現代的なリズムのダンス」のねらいとして、「リズムの特徴を捉え」、「変化のある動きを組み合わせる」、「リズムに乗って全身で」、「自由に弾みながら」踊る<sup>6)</sup>ことを挙げている。しかし、実際の教育現場では、「現代的なリズムのダンス」の本来のねらいに迫ることができていない実践も少なくないという指摘がある。

中村 (2016) は、ダンスに詳しくない教員は「現代的なリズムのダンス」がヒップホップダンスである<sup>7)</sup>という誤った認識をし、「定番のステップ練習」や「既成作品の振り写し」など「技能習得中心」の授業を展開してしまうことに否定的な考えを示している<sup>8)</sup>。また村田 (2008) も「ダンスは外にある内容を身につけていく『習得型』学習ではなく、ゴールフリー的な『探求型』学習を基本<sup>9)</sup>」としている。そのためか、学習指導要領解説 (2018) の現代的なリズムのダンスの動きの例に関する 2 学年ごとの系統表を見ると、「リズムの特徴を捉える」、「ビートに合わせて踊る」、「動きに変化をつける」といった<sup>10)</sup>抽象的な記載が目立ち、具体的なステップや動きの例は一切示されていない。

一方、高橋 (2010) は、「習得」と「探求」を二者択一的に扱うのではなく、「単元前半は基礎学力や基本学習にウェイトを置き、単元後半では課題解決学習に比重を置くような学習モデル<sup>11)</sup>」を検討する必要があるとしている。そして高田 (2014) は、「自由な運動学習」よりも「ステップ習得学習」の方が即興的パフォーマンスに好影響を与えている<sup>12)</sup>としている。また菊池 (2012) は、ステップや技などは、覚えることもはっきりして教えてやすく、ダンスの導入にはうってつけ<sup>13)</sup>としている。

このように、「現代的なリズムのダンス」の学習方法は、導入から 20 年経過した現在においても議論が交わされている。では、学習者にとって受講しやすい、あるいは学習成果を得やすい学習方法はどのようなものなのか。このことを明らかにするためには、まず、学習者自身がこれまで、どのような授業を受け、どのような学習成果を得てきたのか、あるいは現在の学習方法をどのように捉えているのかを

把握する必要があるだろう。

そこで本研究では、「現代的なリズムのダンス」の実施状況や印象について、大学生に対するアンケート調査を通して明らかにすることで、よりよい授業の在り方に関する何らかの知見を得ることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象

調査対象は、S大学およびK大学の学生127人であった。全ての項目に不備なく回答した126人を分析対象とした。分析対象者の学年は、1年生25人(19.8%)、2年生45人(35.7%)、3年生47人(37.3%)、4年生9人(7.1%)であり、全員が中学1、2年でダンスが男女必修化された平成22年以降に中学へ入学している。なお、その中で、ダンス経験があるのは12人(9.5%)、ダンス経験がないのは114人(90.5%)であった。

なお、質問に対する回答の多くは学生の記録が頼りにされている。学生の回答を鵜呑みにするため、実際の状況が正確に反映されなかったり、各学齢期における指導者の意図との間にずれが生じたりする可能性がある。そのため、得られた結果を直ちに一般化し評価するつもりはないことをあらかじめ断っておく。

### 2. 調査項目

調査項目は表1に示した。調査項目は、「属性」、「中高での現代的なリズムのダンスの実施状況とイメージ」で構成した。「属性」は「学年」(1項目)、「ダンス経験の有無」(1項目)の計2項目、「中高での現代的なリズムのダンスの実施状況とイメージ」は「中高におけるダンス3種類の採択率」(1項目)「『現代的なリズムのダンス』の得意・苦手とその理由」(2項目)、「中高での『現代的なリズムのダンス』の学習内容」(1項目)、「『現代的なリズムのダンス』の授業で既存のステップや動きを学習することの必要性とその理由」(3項目)、「中高における『現代的なリズムのダンス』の授業で学習したステップと動き(菊池、2012, pp. 58-67の内容を参考)」(1項目)、「現代的なリズムのダンスの授業で改善すべき点」(1項目)の計9項目で構成した。

### 3. 調査期間

調査は、2020年6月から7月にかけて実施した。

### 4. 回答方法

アンケートはgoogleフォームで作成したため、QRコードもしくはURLを示し、学生が所持するスマートフォン、タブレット端末、PC等から回答させた。不明なステップや動きがある場合は口頭もしくはメールで伝達した。

表1 アンケートの調査項目

1. 学年 (1年・2年・3年・4年)
2. ダンス経験の有無 (有り・無し)
3. 中高におけるダンスの授業ではどのような内容を実施しましたか。*複数回答 中学1年(フォークダンス・創作ダンス・現代的なリズムのダンス) 中学2年(フォークダンス・創作ダンス・現代的なリズムのダンス) 中学3年(フォークダンス・創作ダンス・現代的なリズムのダンス) 高校1年(フォークダンス・創作ダンス・現代的なリズムのダンス) 高校2年(フォークダンス・創作ダンス・現代的なリズムのダンス) 高校3年(フォークダンス・創作ダンス・現代的なリズムのダンス)
4. 「現代的なリズムのダンス」は得意ですか、苦手ですか。 (得意・苦手・実施したことがない)
5. 4で苦手と回答した理由は何ですか。 (授業で行ってきたから・授業で行ってこなかったから・元々苦手だから・見るのは好きだけどやるのは苦手だから)
6. 中高での『現代的なリズムのダンス』の学習内容はどのようなものでしたか。*複数回答 中学1年(既存のステップや動きの練習・既存の振り付けを模倣・振り付けを創作) 中学2年(既存のステップや動きの練習・既存の振り付けを模倣・振り付けを創作) 中学3年(既存のステップや動きの練習・既存の振り付けを模倣・振り付けを創作) 高校1年(既存のステップや動きの練習・既存の振り付けを模倣・振り付けを創作) 高校2年(既存のステップや動きの練習・既存の振り付けを模倣・振り付けを創作) 高校3年(既存のステップや動きの練習・既存の振り付けを模倣・振り付けを創作)
7. 『現代的なリズムのダンス』の授業で既存のステップや動きを学習することは必要だと思いますか。 (必要・不必要・実施したことがないor分からない)
8. 7で必要と回答した理由は何ですか。*複数回答 (ステップや動きができないと踊れないから・その他「自由記述」)
9. 7で不必要と回答した理由は何ですか。*複数回答 (ステップや動きができなくても踊れるから・その他「自由記述」)
10. 中高における『現代的なリズムのダンス』の授業ではどのようなステップや動きを学習しましたか。 *複数回答 (サイドステップ、クロスステップ、ボックスステップ、スリーステップターン、ポップコーン、 サイドランジ、ニュージャックスイング、クラブステップ)
11. 「現代的なリズムのダンス」の授業で改善すべき点があるとすればどんなことですか。特にない場合は無記入をお願いします。 (自由記述)

## 5. 分析方法

得られたデータは、度量を集計した。分析は、データによっては $\chi^2$ 検定による多重比較および直接確率計算を行った。 $\chi^2$ 検定が有意であった際には、Ryan法による多重比較をおこなった。有意水準は5%未満とした。統計処理はjs-STAR version9.8.6jを用いた。

## 6. 倫理的配慮

調査を開始するにあたり、すべての対象者に対して本研究の目的、方法について説明した上で、分析の結果は学会や論文などで発表される可能性があること、その際、データは統計的に処理され、個人情報は一切漏えいすることがないこと、質問紙への回答内容は授業の成績とまったく関係しないことを伝えた。また、アンケート調査への協力は任意であることを伝え、自身のデータが研究目的で使用されることに対して同意を得られた対象者には、各質問に正直に回答するように依頼した。

## Ⅲ. 結果

### 1. 中高におけるダンス3種類の採択率

表2は、中高におけるダンスの授業ではどのような内容を実施しましたか（複数回答）、「フォークダンス、創作ダンス、現代的なリズムのダンス」から選択された回答人数、校種別での $\chi^2$ 値及び多重比較の結果を示した。

中学校では、フォークダンス52人(41.3%)、創作ダンス83人(65.9%)、現代的なリズムのダンス60人(47.6%)である。高校では、フォークダンス17人(13.5%)、創作ダンス22人(17.5%)、現代的なリズムのダンス25人(19.8%)である。 $\chi^2$ 検定(1×3)をおこなった結果、中学での人数の偏りが有意であり( $\chi^2(2)=7.97, p<.05$ )、高校での人数の偏りは有意ではなかった。多重比較によると、中学校の大小関係は、「フォークダンス<創作ダンス」であった。

表3は、中高におけるダンスの授業ではどのような内容を実施しましたか（複数回答）、「フォークダンス、創作ダンス、現代的なリズムのダンス」から選択された回答人数、学年別での $\chi^2$ 値及び多重比較の結果を示した。

中学校1年では、フォークダンス26人(20.6%)、創作ダンス27人(21.4%)、現代的なリズムのダンス18人(14.3%)、中学校2年では、フォークダンス26人(20.6%)、創作ダンス55人(43.7%)、現代的なリズムのダンス28人(22.2%)、中学校3年では、フォークダンス9人(7.1%)、創作ダンス55人(43.7%)、現代的なリズムのダンス28人(22.2%)であった。高校1年では、フォークダンス7人(5.6%)、創作ダンス5人(4.0%)、現代的なリズムのダンス10人(7.9

表2 中高におけるダンス3種類の採択率（校種別）n=126

	①フォークダンス	②創作ダンス	③現代的なリズムのダンス	$\chi^2$ 値	多重比較
中学	52(41.3)	83(65.9)	60(47.6)	7.97*	①<②
高校	17(13.5)	22(17.5)	25(19.8)	1.53ns	

( )内% \* : p<.05

表3 中高におけるダンス3種類の採択率（学年別）

		①フォークダンス	②創作ダンス	③現代的なリズムのダンス	$\chi^2$ 値	多重比較
中学	1年(n=126)	26(20.6)	27(21.4)	18(14.3)	2.06ns	①、③<②
	2年(n=126)	26(20.6)	55(43.7)	28(22.2)	14.44*	
	3年(n=126)	9(7.1)	20(15.9)	23(18.3)	6.27*	
高校	1年(n=126)	7(5.6)	5(4.0)	10(7.9)	1.727ns	
	2年(n=126)	10(7.9)	11(8.7)	14(11.1)	0.941ns	
	3年(n=126)	14(11.1)	8(6.3)	12(9.5)	1.647ns	

( )内% \* : p<.05

%)、高校2年では、フォークダンス10人(7.9%)、創作ダンス11人(8.7%)、現代的なリズムのダンス14人(11.1%)、高校3年では、フォークダンス14人(11.1%)、創作ダンス8人(6.3%)、現代的なリズムのダンス12人(9.5%)であった。 $\chi^2$ 検定(1×3)をおこなった結果、中学2年、3年で  
の人数の偏りが有意であり(中学2年: $\chi^2(2)=14.44$ ,  $p<.05$ 、中学3年: $\chi^2(2)=6.27$ ,  $p<.05$ )、中学1年、  
高校1年、2年、3年で人数の偏りは有意ではなかった。多重比較によると、中学2年の大小関係は、  
「フォークダンス、現代的なリズムのダンス<創作ダンス」であった。

## 2. 「現代的なリズムのダンス」の得意・苦手と苦手な理由

表4は、現代的なリズムのダンスは得意ですか、苦手ですか、「得意、苦手、実施したことがない」  
から選択された回答人数、 $\chi^2$ 値及び多重比較の結果を示した。得意14人(11.1%)、苦手108人(85.7%)、  
実施したことがない・分からない4人(3.2%)であった。 $\chi^2$ 検定(1×3)をおこなった結果、人数の  
偏りが有意であった( $\chi^2(2)=156.78$ ,  $p<.05$ )。多重比較によると、大小関係は「得意、実施したことが  
ない<苦手」、「実施したことがない・分からない<得意」であった。

表5は、現代的なリズムのダンスは得意ですか、苦手ですかの質問で苦手と回答した理由は  
「授業で行ってきたから、授業で行ってこなかったから、元々苦手だから、見るのは好きだけ  
どやるのは苦手だから」から選択された回答人数、 $\chi^2$ 値及び多重比較の結果を示した。授業で  
行ってきたから19人(17.6%)、授業で行ってこなかったから20人(18.5%)、元々苦手  
だから24人(22.2%)、見るだけなら好きだから46人(42.6%)であった。 $\chi^2$ 検定  
(1×4)をおこなった結果、人数の偏りが有意であった( $\chi^2(2)=17.72$ ,  
 $p<.05$ )。多重比較によると、大小関係は、「授業で行って  
きたから、授業で行ってき  
たから、元々苦手だから<  
見るだけなら好きだから」  
であった。

表4 「現代的なリズムのダンス」の得意・苦手 n=126

①得意	②苦手	③実施したこ とがない	$\chi^2$ 値	多重比較
14(11.1)	108(85.7)	4(3.2)	156.78*	①、③<② ③<①

( )内% \* :  $p<.05$

表5 「現代的なリズムのダンス」が苦手な理由 n=108

①授業で行 てきたから	②授業で行って こなかったから	③元々苦手 だから	④見るのは好き だけどやるのは 苦手だから	$\chi^2$ 値	多重比較
19(17.6)	20(18.5)	24(22.2)	46(42.6)	17.72*	①、②、③<④

( )内% \* :  $p<.05$

## 3. 中学および高校での「現代的なリズムのダンス」の学習内容

表6は、中高での「現代的なリズムのダンス」の学習内容はどのようなものでしたか(複数回答)、  
「既存のステップや動きの練習、既存の振り付けを模倣、振り付けを創作」から選択された回答人数、  
校種別での $\chi^2$ 値の結果を示した。中学校では、既存のステップや動きの練習25人(41.7%)、既存の  
振り付けを模倣32人(53.3%)、振り付けを創作29人(48.3%)であった。高校では、既存のステッ  
プや動きの練習8人(6.3%)、既存の振  
り付けを模倣16人(12.7%)、振り付け  
を創作20人(15.9%)であった。 $\chi^2$ 検定  
(1×3)をおこなった結果、高校での人  
数の偏りは有意傾向があり( $\chi^2(2)=5.09$ ,  
 $p<.10$ )、中学での人数の偏りは有意では  
なかった。

表6 中高での「現代的なリズムのダンス」の学習内容

	既存のステップ や動きの練習	既存の振り付け を模倣	振り付けを 創作	$\chi^2$ 値
中学(n=60)	25(41.7)	32(53.3)	29(48.3)	0.86ns
高校(n=25)	8(32.0)	16(64.0)	20(80.0)	5.09†

( )内% † :  $p<.10$

#### 4. 「現代的なリズムのダンス」の授業で既存のステップを学習することの必要性

表7は、「現代的なリズムのダンス」の授業で既存のステップを学習することは必要だと思いますか、「必要、必要ない、実施したことがない or 分からない」から選択された回答人数、 $\chi^2$  値及び多重比較の結果を示した。必要 101 人 (80.2%)、必要ない 16 人 (12.7%)、実施したことがない・分からない 9 人 (7.1%) であった。 $\chi^2$  検定 ( $1 \times 3$ ) をおこなった結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=124.9$ 、 $p<.05$ )。多重比較によると、大小関係は、「必要ない、実施したことがない・分からない<必要」であった。

表8は、「現代的なリズムのダンス」の授業で既存のステップを授業で学習することは必要と回答した理由は何ですか、「ステップや動きができないと踊れないから、その他 (自由記述)」から選択された回答人数及び直接確率計算の結果を示した。「ステップや動きができないと踊れないから」と「その他」を直接確率計算した結果、「ステップや動きができないと踊れないから」が「その他」よりも有意に多かった ( $p<.05$  (両側検定))。その他の自由記述は、「難しい動きができなくても、ステップさえできれば踊りになると思うから」、「ステップの取りから覚えることで、他のスポーツ種目でも生きてくるから」、「楽しむ幅が広がるから」、「ダンスをつくる材料としてステップを覚えるのは良いと思うが、そこだけにフォーカスして楽しむということを忘れそう」、「動きの幅が広がるから」、「音のハメ方の幅が広がるから」であった。

表9は、「現代的なリズムのダンス」の授業で既存のステップを授業で学習することは必要ないと回答した理由は何ですか、「ステップや動きができなくても踊れるから、その他 (自由記述)」から選択された回答人数及び直接確率計算の結果を示した。「ステップや動きができなくても踊れるから」と「その他」を直接確率計算した結果、「ステップや動きができなくても踊れるから」が「その他」よりも有意に多かった ( $p<.05$  (両側検定))。その他の自由記述は、「練習しても意味がないから」、「楽しくない」であった。

表7 既存のステップを学習することの必要性 n=126

①必要	②必要ない	③実施したことがない・分からない	$\chi^2$ 値	多重比較
101(80.2)	16(12.7)	9(7.1)	124.9*	②、③<①

( )内% \* :  $p<.05$

表8 既存のステップの学習は必要と回答した理由 n=101

ステップや動きができないと踊れないから	その他	p値 (両側検定)
97(96.0)	5(4.0)	0.00*

( )内% \* :  $p<.05$

表9 既存のステップの学習は必要ないと回答した理由 n=16

ステップや動きができなくても踊れるから	その他	p値 (両側検定)
14(87.5)	2(12.5)	0.01*

( )内% \* :  $p<.05$

#### 5. 中高における「現代的なリズムのダンス」の授業で学習したステップと動き

表10は、中高における「現代的なリズムのダンス」の授業ではどのようなステップや動きを学習しましたか (複数回答)、「サイドステップ、クロスステップ、ボックスステップ、スリーステップターン、ポップコーン、サイドランジ、ニュージャックスイング、クラブステップ」から選択された回答人数、 $\chi^2$  値及び多重比較の結果を示した。

サイドステップ 24 人 (75.0%)、クロスステップ 20 人 (62.5%)、ボックスステップ 25 人 (78.1%)、スリーステップターン 6 人 (18.8%)、ポップコーン 6 人 (18.8%)、サイドランジ 6 人 (18.8%)、ニュージャックスイング 1 人 (3.1%)、クラブステップ 4 人 (12.5%) であった。 $\chi^2$  検定 ( $1 \times 9$ ) をおこなった結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=57.8$ 、 $p<.05$ )。多重比較によると、大小関係は、「ス

表 10 中高における「現代的なリズムのダンス」の授業で学習したステップと動き n=32

①サイド ステップ	②クロス ステップ	③ボックス ステップ	④ランニ ングマン	⑤スリース テップター ン	⑥ポップ コーン	⑦サイドラ ンジ	⑧ニュー ジャックス イ ング	⑨クラブ ス テップ	$\chi^2$ 値	多重比較
24(75.0)	20(62.5)	25(78.1)	12(37.5)	6(18.8)	6(18.8)	6(18.8)	1(3.1)	4(12.5)	57.8*	⑤、⑥、⑦、⑧、⑨<① ⑧、⑨<② ⑤、⑥、⑦、⑧、⑨<③

( )内% \* : p<.05

リーステップターン、ポップコーン、サイドランジ、ニュージャックスイグ、クラブステップ<サイドステップ>、「ニュージャックスイグ、クラブステップ<クロスステップ>」、「スリーステップターン、ポップコーン、サイドランジ、ニュージャックスイグ、クラブステップ<サイドステップ<ボックスステップ>」であった。

## 6. 「現代的なリズムのダンス」の授業で改善すべき点

表 11 に「現代的なリズムのダンス」の授業で改善すべき点があるとすればどんなことですか（特になければ無記入）、「自由記述」で回答された結果を示す。

まず、「恥ずかしい」と感じる学習者が音に乗れる、あるいは参加がしやすいと感じる授業づくりが必要といった回答が 7 件で最も多かった。次に、（振り付けなどを）生徒に丸投げするのではなく、先にステップや基礎的な動きを教える必要があるといった回答が 5 件であった。そのほか、少数の回答として、楽しさの重視、流行の曲を使用、ダンスの時間の増加、習熟度別の学習、体育祭での披露といった積極的な提案に加え、全員に強制する必要はない、苦手な人が多く、何のために行うか分からないといった消極的な回答もあった。

表 11 「現代的なリズムのダンス」の授業で改善すべき点

- ・ 恥ずかしい、と思う子が多いと感じるので、その配慮が出来たら良いと思う。
- ・ 恥ずかしさを捨てるのがまず大事。
- ・ やはり、「恥ずかしい」「からかわれるのではないか」という思いが強と思うので、1人でダンスの発表する場を設けることは避けた方がいいと思う。
- ・ 楽しく恥ずかしがらずに音に乗れる授業環境。
- ・ 全員が恥ずかしくなく行える工夫が必要だと思います。
- ・ みんなの前で発表するのが苦手な子がいるのでグループごとの発表は難しい時があった。
- ・ 動画に収めて先生に見てもらっただけなら割とみんな恥ずかしがらずに踊っていた。
- ・ 全部生徒で考えて丸投げだったので、ステップなどは教えてからにしてほしい。
- ・ 自由な部分と基礎をやる部分を明確に分けること。
- ・ 習得するステップの数を増やす。
- ・ 本物のダンスの外部者に授業をやってもらい動きを教えてもらってから自分たちで創作などをする。
- ・ 習っている子や得意な子をもっと積極的に教えたらみんなよくなると思う。
- ・ 楽しさを重視した方が良いかなと思いました。
- ・ 流行の音楽や曲とかで踊るようにすればいいと思います。
- ・ もっとたくさんの時間をダンスの授業に費やしたほうがいいと思います。
- ・ レベルや習熟度ごとのグループ分けを行う。
- ・ 授業だけでなく、体育祭などで披露したら面白かった。
- ・ 全員に強制する必要はないとおもいます。
- ・ ダンスは苦手な人が多いことに加えて正直何のために行うのかがあまり分からない。

## IV. 考察

中学および高校における「現代的なリズムのダンス」の採択率は、中学で 60 人 (47.6%)、高校で 25 人 (19.8%) であり、校種別でみるとほかの 2 種類と有意差はなかった。また、学年別で見ると、中学 2 年時には創作ダンスと比較し、フォークダンスと現代的なリズムのダンスが有意に低いことが分かった。平成 24 年度に東京都公立中学校 1、2 年生を対象に行った調査結果では、現代的なリズムのダンスの採択率が 7 割以上と報告されている<sup>14)</sup>が、今回のアンケートに回答した平成 22 年度から平成 24 年度に中学へ入学しているはずの大学生は、先行研究の採択率を大きく下回った。これは、地域による学習内容や学習機会の違いが影響していると考えられる。

現代的なリズムのダンスの得意・苦手では、得意が 14 人 (11.1%) に留まり、108 人 (85.7%) が苦手と有意に多かった。苦手と回答している中で、その理由を選択させたところ、「見るのは好きだけ

どやるのは苦手だから」を選択した学生が有意に多かった。これは、テレビやSNS、動画配信サイトで気軽に閲覧できるなど、興味を持ちやすいためであると推察される。また、「授業で行ってきたから」19人(17.6%)、「授業で行ってこなかったから」20人(18.5%)、「元々苦手だから」24人(22.2%)に有意な差はなかった。授業で行ってこなかったと回答した場合は、経験が不足していることが要因と考えられる。一方、授業で行ってきたから、元々苦手だから、と回答した場合は、本論4.7で示した基本を習うことなく生徒に丸投げの授業や「恥ずかしさ」を感じる授業を受けてきたことに起因していると推察される。

「現代的なリズムのダンス」の学習内容については、「既存のステップや動きの練習」「既存の振り付けを模倣」「振り付けを創作」のうち、中高ともに人数の偏りは有意ではなかった。このことから、現場教員の指導力や経験値、生徒の実態によって実施内容が異なることが推察される。また、「既存のステップや動きの習得」は中学25人(41.7%)、高校8人(31%)に対し、「振り付けを創作」は中学29人(48.3%)、高校20人(80%)であった。この結果から、若干ではあるが、中学では基本に、高校は応用に力を入れていることが示唆された。これは、高校ではダンスが選択性であり、ある程度の技能を有する生徒が履修していることから、基礎を実施する必要性が低いためであると推察される。また、「既存の振り付けを模倣」が中学32人(53.3%)、高校16人(64.0%)といずれも半数以上が実施していることから、中村ら(2016)が指摘する「ヒップホップをやらなければならない」という誤った解釈<sup>15)</sup>をしている教員も多いと考えられる。

文部科学省(2018)は、現代的なリズムのダンスについて、「リズムの特徴を捉え」「自由に」踊るなどをダンス本来の目的とし、既存のステップや振り付けの模倣といった習得型の授業は改めるべき<sup>16)</sup>としている。一方、現代的なリズムのダンスの授業で既存のステップを学習することについては、101人(80.2%)が必要と有意に高い回答率を示した。必要と回答した理由では、97人(96.0%)が「ステップや動きができないと踊れないから」を選択した。また、「その他」を選択した5人(4.0%)の学生も「楽しむ幅が広がるから」、「動きの幅が広がるから」、「音のハメ方の幅が広がるから」と記述した。回答者はほとんどがダンスを専門的に経験していない(経験あり12人(9.5%)、経験なし114人(90.5%))ことから、特に経験の少ない学習者にとっては、ダンスの本来の目的である「探求型」の学習を実施する前に基本的なステップなどを習得する「習得型」の学習が必要と感じていることが示唆された。このことから、学習者は、高橋(2010)や高田(2014)が示す基礎学力や基本学習から課題解決学習に発展させるような学習<sup>17) 18)</sup>が受講しやすい授業形態と捉えていることが伺えた。

中学および高校の「現代的なリズムのダンス」で学習したステップや動きについては、サイドステップ24人(75.0%)、クロスステップ20人(62.5%)、ボックスステップ25人(78.1%)を選択した人数が有意に多かった。これは、ダンスを踊る上で汎用性が高く、動作が単純で、習得が容易なためであろう。また、ランニングマンも12人(37.5%)と、上記3つ以外のステップと比較すると多く実施されていた。これは、流行りのアーティストによるダンスにランニングマンが含まれていたことから、学習者の興味関心を引きやすく、効率的に習得できたためであろう。このように、短時間で習得できる簡易な、あるいはマスメディアの影響で身近となった動作に関しては、授業にも多く取り入れられていることが分かる。一方、スリーステップターン、ポップコーン、サイドランジ、ニュージャックスイング、クラブステップといったヒップホップダンスを踊る上では欠かせない基本的なステップの実施率は6%以下とわずかであった。これらのステップの中には、習得に多くの時間を必要とする複雑なものもあると推察される。そのため、全てのステップを授業内で学習しようとするれば、「現代的なリズムのダンス」における本来のねらい<sup>19)</sup>から逸れる学習内容になりかねない。しかし、表12でも示されている「全部生徒で考えてと丸投げだったので、ステップなどは教えてからにしてほしい」や「自由な部分と基礎をやる部分を明確に分けること」といった回答から分かるように、特にダンスの経験が少ない学習者は、実施できるステップや動きを手がかりに踊りを構成すると推察される。つまり、ステップや動きのバリ

エーションを増やすことで、応用の幅も増えるため、結果的に「自由」や「変化のある動き」といった「現代的なリズムのダンス」における本来的なねらいに迫ることができるのではないだろうか。したがって、現在実施率が低く、やや難易度の高いステップに関しても、学年を跨ぎながら体系的に学習することで、「現代的なリズムのダンス」の学習成果を高めることに繋がると考えられる。

## V. 結論

本研究では、「現代的なリズムのダンス」の実施状況や印象について、大学生に対するアンケート調査を通して明らかにすることで、よりよい授業の在り方に関する何らかの知見を得ることを目的とした。

まず、「現代的なリズムのダンス」の採択率は、ほぼ同年に実施された東京都での7割を大きく下回ったことから、地域による学習内容や学習機会の違いがあることが明らかになった。「現代的なリズムのダンス」の得意・苦手については、85.7%の学生が苦手と回答した。しかし、その理由として、「見るのは好きだけどやるのは苦手だから」と回答した人数が有意に多く、学習者の興味関心は高いことが伺えた。また、「授業で行ってこなかったから」と経験不足を理由としている場合もあれば、「授業で行ってきたから」や「元々苦手だから」と恥ずかしさを感じる授業を受けてきたことなどが苦手の理由になっている場合もあると推察された。

次に、現代的なリズムのダンスの内容については、「既存のステップや動きの練習」「既存の振り付けを模倣」「振り付けを創作」のうち、中高ともに人数の偏りは有意ではなかった。文部科学省(2018)は、現代的なリズムのダンスについて、「リズムの特徴を捉え」「自由に」踊るなどをダンス本来の目的とし、既存のステップや振り付けの模倣といった習得型の授業は改めるべきとしている。しかし、現代的なリズムのダンスの授業で既存のステップを学習することの必要性については、80.2%と多くの学生が「必要」を選択し、その理由として、96.0%の学生が「ステップや動きができないと踊れないから」を選択した。このことから、特に経験の少ない学習者にとっては、ダンスの本来的な目的である「探求型」の学習を実施する前に基本的なステップなどを習得する「習得型」の学習が必要と感じていることが示唆された。

最後に、中学および高校の「現代的なリズムのダンス」で学習したステップや動きについては、サイドステップ(75.0%)、クロスステップ(62.5%)、ボックスステップ(78.1%)が有意に高い実施率を示し、ランニングマン(37.5%)もやや高い実施率を示した。このことから、短時間で習得できる簡易な、あるいはマスメディアの影響で身近となった動作に関しては、授業にも多く取り入れられていることが分かった。一方、スリーステップターン、ポップコーン、サイドランジ、ニュージャックスイング、クラブステップといったヒップホップダンスを踊る上では欠かせない基本的なステップの実施率は6%以下とわずかであった。これらのステップの中には、習得に多くの時間を費やす複雑なものもあると推察されるため、全てを授業内で学習しようとするれば、「現代的なリズムのダンス」における本来的なねらいから逸れる学習内容になりかねない。しかし、特にダンスの経験が少ない学習者は、実施できるステップや動きを手がかりに踊りを構成すると推察される。そのため、やや難易度の高いステップに関しても、学年を跨ぎながら体系的に学習することで、応用の幅も増え、結果的に「現代的なリズムのダンス」における本来的なねらい<sup>5)</sup>に迫ることができるのではないだろうか。

## VI. 課題

本研究は、回答の多くが学生の「記憶」が頼りにされている。質問に対する学生の回答を鵜呑みにしたため、実際の状況が正確に反映されていない、あるいは各年齢期における教員の意図との間にずれが生じている可能性がある。また、「現代的なリズムのダンス」の授業内容であれば「ダウンやアップといったリズム取り」、ステップや動きであればロックダンスで用いられる「ロック」や「スクービードゥ」などの選択肢も考えられる。さらに、今回の回答者は、中学1、2年でダンスが男女必修化とされてか



ら間もない段階で授業を受けていたため、近年とは実施内容が大きく異なっている可能性もある。これらは、本研究の限界であった。今後は、質問内容や回答の項目を精査するとともに、現場教員や生徒に調査をすることで、より正確な「現代的なリズムのダンス」の実施状況を把握していきたい。

## Ⅶ. 謝辞

本研究を遂行するにあたり、調査にご協力いただいたS大学およびK大学の学生の皆様、データ処理の方法についてご助言いただいた岐阜聖徳学園大学教授の稲垣良介先生に心より感謝申し上げます。

## 注・文献

- 1) 文部科学省 (2008) : 中学校学習指導要領解説—体育編—, 東山書房, 京都, 4.
- 2) 文部科学省 (2018) : 中学校学習指導要領解説—保健体育編—, 東山書房, 京都, 168.
- 3) 文部科学省 (2019) : 高等学校学習指導要領解説—保健体育編—, 東山書房, 京都, 156.
- 4) 文部科学省 (1998) : 中学学習指導要領解説—体育編—, 東山書房, 京都, 9.
- 5) 中村恭子 (2016) : 現代的なリズムのダンス=ヒップホップダンスという誤解を解いて自主創造的なダンス学習へ, 体育科教育, 64(3), 大修館書店, 東京, 28-31.
- 6) 2) に同じ, 168.
- 7) 朝日新聞 (2012) : ヒップホップ、先生奮闘、中学の保健体育、来月からダンス必修化, 朝日新聞, 東京, 2012年3月29日朝刊.
- 8) 5) に同じ, 28-31.
- 9) 村田芳子 (2012) : 表現運動・ダンスの授業で身に付けさせたい学習内容とは?, 体育科教育, 60(3), 大修館書店, 東京, 14-19.
- 10) 2) に同じ, 168.
- 11) 高橋健夫 (2010) : 学習指導要領の基本方針と体育授業, 中学保健体育科ニュース, 1(3), 大修館書店, 東京, 1-8.
- 12) 高田康史・松尾千秋・矢野下美智子 (2014) : 現代的なリズムのダンスにおける学習内容の検討—「ステップ習得学習」と「自由運動学習」の比較を通して—, 広島体育学研究, 40, 9-20.
- 13) 菊池由見子 (2012) : 中学校ダンス授業のコツ, ナツメ社, 54-67.
- 14) 5) に同じ, 28-31.
- 15) 5) に同じ, 28-31.
- 16) 2) に同じ, 168.
- 17) 11) に同じ, 1-8.
- 18) 12) に同じ, 9-20.
- 19) 2) に同じ, 173.

